



# 自然科学書協会 会報

## NSPA JAPAN



THE NATURAL SCIENCE PUBLISHERS' ASSOCIATION OF JAPAN

2024年7月25日 No.3  
(通算108号)

### 目次

1. 第74期 定時総会・会員報告会・会員懇親会 報告（総務委員会） ..... 2
2. 第73期「自然科学書フェア 2024」視察報告（販売・出展委員会） .....5
3. 第73期 事業報告・第74期 事業計画 ..... 7
4. 自然科学の時間：プラネタリウム 100周年 ..... 12  
(毛利 勝廣：名古屋市科学館 学芸員)
5. 会員社訪問 社長インタビュー（医学書院 社長 金原 俊） ..... 16
6. 第74期 第1回研修会報告（研修委員会） ..... 19
7. 事務局だより ..... 20
8. 編集後記 ..... 21



発行人：池田 和博 / 編集：広報委員会

一般社団法人 自然科学書協会

<https://www.nspa.or.jp/>

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-101 神保町 101 ビル 3階

TEL : 03-5577-6301

## ◆ 1. 第74期 定時総会・会員報告会・会員懇親会 報告 ◆

### < 定時総会 >

7月18日(木)16:30～、出版クラブホール4F会議室において当協会の第74期定時総会が開催されました。

司会・進行の森田総務副委員長より総会成立の報告があった後、定款第28条に基づき池田理事長が議長の任にあたりました。また、定款第32条に則り議事録署名人として南條理事、筑紫理事の2名が選任され、下記の議案審議に進みました。

第1号議案「第73期事業報告書案承認の件」については、梅澤副理事長より説明があり、自然科学書フェア2024の開催(開催店:ジュンク堂書店 藤沢店)、図書館等公衆送信補償金管理協会(SARLIB)への参加、研修会の開催など概要報告がありました。

第2号議案「第73期事業年度収支決算書案承認の件」については、白石総務委員長より前期差増減の大きな費目を中心に説明があり、貸借対照表として当期はマイナス決算となったが、職員退職金支給などの影響による一期的である旨報告がありました。



池田理事長



森田総務副委員長



及川監事



定時総会 全体風景

以上を受け、監事を代表して及川監事より事業報告および計算書類などの監査結果として、いずれも特段の指摘事項などはなく適正であるとの報告がありました。

そして、第1号議案・第2号議案について議長が決議を諮ったところ、出席者全員異議なくこれを可決承認しました。

その後、「第74期事業計画及び収支予算の件」について報告があり、司会の閉会宣言により第74期定時総会は終了しました。

### <会員報告会>

定時総会終了後の会員報告会では、各委員会から下記の項目を中心に概要報告がありました。

- 販売・出展委員会（吉野委員長）：期をまたいで7月31日（水）まで、ジュンク堂書店 藤沢店において開催中の自然科学書フェア2024について報告がありました。タウン誌に2回広告を出すなどしてPRし、成果も上がっているとの説明でした。
- 著作・出版権委員会（筑紫委員長）：授業目的公衆送信補償金等管理協会（SARTRAS）および図書館等公衆送信補償金管理協会（SARLIB）の運営に関する推移状況について報告がありました。とくにSARTRASの2021年～2023年分の補償金分配状況について詳細な説明がなされました。
- 研修委員会（片岡委員長）：2021年以降、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン開催、ハイブリッド開催など研修会の形式を模索してきたが、当期6月7日（金）開催の研修会以後は原則リアル開催のみとしたいとの方針が示されました。また、今後は各社の社員業務に直接的に役立つテーマも検討したい旨説明がありました。



吉野販売・出展委員長



筑紫著作・出版権委員長



片岡研修委員長



牛来広報委員長



白石総務委員長

- 広報委員会（牛来委員長）：年に4回発行する会報（電子版）を通じた会員各社への有益な情報提供、協会 Web サイトの管理・運営、業界紙などを活用した外部への告知などをおもなミッションとして活動している旨報告がなされました。そして今後も積極的な広報活動を展開していくとの説明がありました。
- 総務委員会（白石委員長）：事務局職員退職に伴う業務継承が順調に進んでいること、また和文会員名簿の更新版が Web サイトにアップされた一方、英文会員名簿の冊子版については活用状況を踏まえ発行を休止した旨説明がありました。

### <会員懇親会>

同じ出版クラブホールの3Fに場を移し、引き続き会員懇親会が開催されました。

池田理事長の挨拶では、昨今の教科書市場低迷の背景として大学における講義のあり方がパワーポイント中心に変わってきたのではないかと推察が示され、厳しい状況下でも会員社間での情報交換を図り協会として課題に取り組んでいこうとの呼びかけがありました。

その後、小立相談役のご発声により高らかに乾杯が唱和され、参加者は大いに歓談し交流を深める場面が会場内のあちこちで見られました。そして、村上副理事長の中締めにより、新たな期への期待を込め懇親会は幕を閉じました。

（総務委員長 白石 泰夫：医歯薬出版）



小立相談役



村上副理事長



懇親会 全体風景

## ◆ 2. 第73期「自然科学書フェア 2024」視察報告 ◆

第73期の「自然科学書フェア 2024」は、神奈川県藤沢市にある、ジュンク堂書店 藤沢店様にて、2024年5月14日（火）～7月31日（水）までの2ヶ月半にわたる開催となりました。

同店舗は、JR 藤沢駅北口のビックカメラ藤沢店7・8階にあり、880坪の広さがあります。藤沢駅は小田急線、江ノ島電鉄線のターミナル駅でもあり、通勤・通学者が多数利用しており、同店舗には目的買いで立ち寄る客層も多いとのこと。同店舗でのフェアは初開催となります。

池田理事長、村上副理事長、吉野販売・出展委員長、當山同委員（共立出版）、私鬼木に加えて、今期フェア開催にあたり委員交代までお力添えをいただきました石川元委員（金原出版）にも参加していただき、フェア中盤へ差し掛かる6月11日（火）に6名で視察し、今回フェアを担当していただいた原田氏はじめ、仁科氏、藤沢店前店長の佐藤氏と前自然科学書担当の堀口氏、そして新店長の武内氏と面会しました（メインでご担当していただいた、阿部氏は体調不良で欠席）。

フェア会場は、7階エスカレーター前にある、「新刊・話題書」の反対側の棚を中心に約18本空けて使用し、47社1,126点2,405冊の本が並びました。当初想定した棚10本では足りず、売場面積を拡張していただきました。

売上は5月14日から約1ヶ月で45万円と、「幸先のいいスタート」ということでした。また、全テーマから売上げがあり、大型フェアにすることの相乗効果を実感していただきました。



(石川元委員) (當山委員) (鬼木副幹事) (堀口氏) (武内店長)  
 (村上副理事長) (池田理事長) (佐藤前店長) (仁科氏) (原田氏) (吉野委員長)

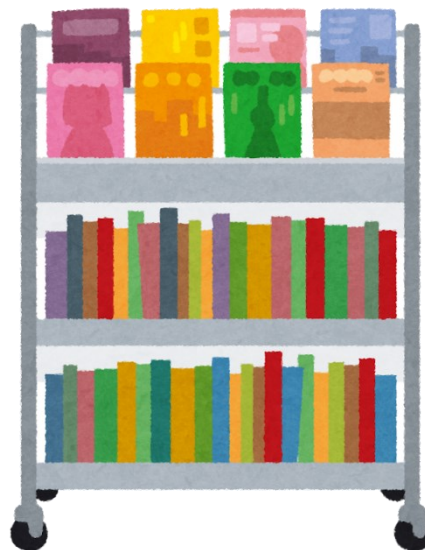
フェアをご覧になっている客層は、中高年の方が中心ですが男女色々で、いつも来店されるお客様がメインになっているとのことでした。

棚に関しては、日々面陳・平積み商品を入れ替えることで、新鮮な状態を維持できるように取り組んでいただきました。今回は例年よりも早く、ポスター掲示とフェア開催告知しおりの配布をスタートしていただき、開催時には、しおりをほぼ配り終えている状態とのことでした。

また、今回は地域誌である「タウンニュース 藤沢版」に広告掲載をした結果、掲載紙をお持ちになって、「フェアはどこで開催していますか？」との問い合わせも多数あり、広告効果がでているとのことでした（6月下旬、茅ヶ崎版にも掲載）。

最後に、原田様から、「残り1ヶ月半、商品の見せ方を工夫しながら、最後まで盛り上げていきます」とお言葉をいただきました。

（販売・出展委員会 フェア小委員会 副幹事 鬼木 大輔：誠文堂新光社）



### ◆ 3. 第73期 事業報告・第74期 事業計画 ◆

#### 1) 販売・出展委員会

販売・出展委員会は、小委員会の見直しを実施し、第73期より「フェア小委員会」のみといたしました。第72期までは「国際委員会」がございましたが、昨今の海外のブックフェアなどの出展諸条件を鑑み廃止することとなりました。今後は海外のブックフェアなどの動向に注視しながら対応を模索していく所存です。

「フェア小委員会」では、引き続き当協会会員社の出版物を多くの方々に周知するため「自然科学書フェア」を開催いたします。

第73期の「自然科学書フェア」は、神奈川県藤沢市にあります、ジュンク堂書店 藤沢店で5月14日(火)～7月31日(水)の期間で開催となりました。

同店は、2008年12月にJR藤沢駅北口のビックカメラ藤沢店7・8階(880坪)にオープンしました。藤沢駅は小田急線、江ノ島電鉄線のターミナル駅であり、近隣には、慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス、日本大学 湘南キャンパス、湘南工科大学、多摩大学 湘南キャンパス、文教大学 湘南キャンパス、湘南鎌倉医療大学、鎌倉女子大学などがあります。

フェアの規模は、出展社47社、1,126点、2,405冊で開催となりました。

また、前年同様に、基本5ジャンル(理学・工学・農学・医学・家政学)のほか、「図鑑・事典」「人工知能」「健康・運動・リハビリテーション」「宇宙・天文」「動物たち」「防災」といった小テーマを掲げたミニコーナーも併設し、フェアの活性化を図りました。

販売促進といたしましては、店内にてポスターの掲示、チラシ・しおりの配布を行いました。さらに、教育機関・図書館・研究機関・公共施設などへチラシ配布、ポスター掲示などで周知するほか、地元のタウン誌などで多くの方々にアピールし大変好評を博しました。

事業報告が中心となりましたが、第74期以降も適切な時期にフェアの開催を実現すべく委員の皆様と力を合わせ委員会活動に尽力してまいります。

今後とも委員会活動へご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

最後に、第73期もフェア小委員会の委員の皆様には社業がご多用な中、多大なるご尽力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(委員長 吉野 和浩：裳華房)

## 2) 著作・出版権委員会

### <第73期事業報告>

第73期は委員長に私筑紫が、副委員長には小立健太理事が就任し、正・副委員長ともに新任となり、会員各社を代表する21名の委員にご協力いただきました。

第73期の委員会開催は12月1日に1回のみとなりました。第73期では引き続き出版者著作権管理機構(JCOPY)、授業目的公衆送信補償金等管理協会(SARTRAS)、図書館等公衆送信補償金管理協会(SARLIB)の運営に構成団体として参加してまいりました。第73期の主な活動を以下に報告いたします。

○ JCOPY 関連：当委員会からは運営小委員会に1名、運営委員会に2名の委員が参加しました。主には JCOPY が SARTRAS より受託している補償金分配業務に関する内容でした。

○ SARTRAS 関連：当協会は SARTRAS の活動に出版教育著作権協議会(出著協)を通して関わっています。当委員会からは委員長が出著協運営委員会メンバーとして参加しました。

2021年度利用分については、補償金のうち未分配となっている国内著作権者への分配にかかる作業が主に議論されました。6月には著作権者へ個人情報をお知らせするための圧着封筒の転送作業が出版社へ依頼され、これによって当該年度の補償金分配の目的が立ってきました。

2022年度利用分については、JCOPY で利用データ整備作業の大部分を受託しないこととなったため、その対応について議論がなされました。2024年7月現在、データ整備作業の見通しは不透明で、補償金分配がいつになるのかわからない状況です。

2023年度は本年3月に終わりましたが、利用データ整備作業、補償金分配作業については未定となっており作業は開始されていません。前年度までの分配にかかる作業の煩雑さを踏まえてスキームの改善を求めることを検討しています。

○ SARLIB 関連：当協会からは2名の委員が SARLIB 委員会に参加していますが、現状、公衆送信サービスを行う特定図書館がなくサービス開始に至っていません。競合する電子書籍(雑誌)配信事業の利益を害することのないよう、本サービスの対象外とする除外リスト作成が議論されました。

### <第74期事業計画>

○ JCOPY 関連：引き続き当協会からは3名の委員が参加することで、その活動に協力してまいります。

○ SARTRAS 関連：引き続き出版教育著作権協議会の活動に参加することで協力してまいります。高等教育採用品を中心とする出版社からは、本制度により指定教科書を購入しない傾向が見られるのではないかという意見も出ており、当委員会で意見を集約して当協会としての対応を検討してまいります。

○ SARLIB 関連：引き続き当協会からは2名の委員が参加することで、その活動に協力してまいります。

そのほか、会員社から著作権関連の問い合わせがあった場合には、随時対応してまいります。委員としてご協力いただいております皆様にはこの場を借りて感謝いたしますとともに、第74期も引き続きお力添えいただけますようお願い申し上げます。

(委員長 筑紫 和男：建帛社)



### 3) 研修委員会

研修委員会では、業界を取り巻くトレンドや会員各社様の業務に有益な情報・知見を提供していただける有識者をお招きしての研修会、および、広く一般に向けて自然科学の啓蒙活動を行う講演会、通称サイエンスカフェの企画・開催を主要な活動としております。

2020年より約3年にわたり猛威を振るった新型コロナウイルス感染症が、感染症法上の位置づけを5類感染症に移行されて本年5月で約1年が経過しました。行動制限が行われなくなり、マスク着用などの感染症対策が個人の判断に委ねられたものの、第73期前半ははまだイベント開催には慎重な空気感が漂う中での活動開始となりました。

当委員会では感染予防の観点から、2020年以降に開催した研修会はすべて、Zoom およびYouTubeを活用したオンライン形式で開催してまいりました。オンライン講演は、コロナ禍のもたらした思わぬ副産物でしたが、その利便性や将来性から有効活用していきたいと考え、第73期中に、リアルとオンラインを併用するハイブリッド方式での研修会開催を模索しました。しかしながら、配信業務委託先の選定および委託業務料の見積もりまで準備を進めましたが、コスト面や専門スキルを有する人材の確保、および、ネット配信の潜在的リスクに対する演者側の忌避感もあり、残念ながら力及ばず、開催実現には至りませんでした。

第73期中に企画した研修会2件については、開催方式を再考し、リアルのみでの開催で準備を進めました。開催は第74期へずれ込みましたが、具体的には、文化産業信用組合による「<最新>出版社のための補助金・助成金解説&顧客支援課のサービスと事例」を6月7日(金)に、(株)青山財産ネットワークスによる「出版社経営者必見——失敗から学ぶ円滑な事業継承」を7月30日(火)に、文化産業信用組合3階大会議室にて催すことになりました。前者は当協会の単独開催、後者は出版梓会との合同開催となります。

ご尽力いただいております当委員会委員の皆様にご礼申し上げますとともに、引き続き、会員各社様のご理解ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(委員長 片岡 一成：恒星社厚生閣)

### 4) 広報委員会

第73期は役員改選の年にあたり、広報委員長は私が留任することとなり、副委員長には曾根良介理事(化学同人)が就任されました。委員には原 純子委員(オーム社)、山田貴史委員(化学同人)、門間順子委員(共立出版)、加藤義之委員(建帛社)、高田由紀子委員(恒星社厚生閣)、新井明良委員(コロナ社)、逸見健介委員(南江堂)、飯岡千恵子委員(丸善出版)〈会員社名五十音順〉の8名に尽力いただいています。

第73期には委員会を計4回(第1回2023年10月10日、第2回2024年1月11日、第3回2024年4月9日、第4回2024年7月9日)、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催しました。

広報委員会の活動内容は主に①「会報」発行事業、②協会ホームページの管理・運営、③協会活動の外部告知、の三つです。

#### ① 「会報」発行事業

会報は、2023年No.4(2023年11月10日発行)、2024年No.1(2024年1月12日発行)、

同 No.2 (2024年4月9日発行) および本稿を掲載している同 No.3 (2024年7月25日発行) の計4回発行しました。会報は第69期より電子配信の形式で発行をしてきました。今後とも会員各社に対しまして有意義な情報提供をしてまいります。

## ② 協会ホームページの管理・運営

第71期に全面的なりニューアルを行い、見やすくなったとのご評価をいただいております。引き続き最新かつ有益な情報提供をしてまいります。何かお気づきの点やご要望などがございましたら、事務局までご連絡ください。

## ③ 協会活動の外部告知

自然科学書フェアの開催告知を「新文化」「文化通信」にそれぞれ掲載しました。

第74期も引き続き先述の三つの柱を中心に活動していく方針です。ホームページから出版業界に対して当協会の存在意義や活動内容を発信することと、業界紙などでの告知を通して、より一層認知度を高めていきたいと考えています。

会員各社の皆様におかれましては、引き続き広報事業にご協力とご理解をよろしくお願い申し上げます。

(委員長 牛来真也：コロナ社)

## 5) 総務委員会

総務委員会は、庶務・総務・財務を担当し、円滑な協会運営に寄与すべく、事務局と協力しながら活動を行っています。

以下、主な項目ごとに第73期の事業報告と第74期の事業計画について記します。

### ○ 定例理事会・会員報告会・会員懇親会の運営について

第73期の定例理事会・会員報告会・会員懇親会は、すべて対面形式で開催されました。新型コロナウイルス感染症の分類が5類感染症となって1年が経過し開催形式を特段検討する必要がなくなったことで、従前のおりスムーズな運営が可能となっています。第74期も同様に取り組んでまいります。

### ○ 事務局業務引き継ぎについて

第73期は長年事務局に勤務いただいた高山美恵子氏の退職・嘱託契約への移行に伴い、新任担当者・柳橋和美氏への業務引き継ぎを進めてきました。またこの機に併せて、これまで手つかずだった就業規則・賃金規程の整備、職員の社会保険・雇用保険などへの加入を実行し労働環境を整えました。

第74期については、高山氏の嘱託契約も終了となり、業務引き継ぎを滞りなく完了すべく対応を進めます。

### ○ 会員名簿について

Web版和文会員名簿については、会員各社に修正依頼を行ったうえで、協会ホームページへのアップロードを完了しました。一方、長らく発行を続けてきた英文会員名簿(冊子)については、利用状況の変化に伴って発行部数と配布部数の乖離が大きくなってきたことも踏まえ、発行を休止することとしました。今後については推移状況を見ながら判断していきたいと考えております。

○「出版・印刷人の集い」について

出版メディア協議会・出版梓会・当協会の交流を目的に開催されてきた「出版・印刷人の集い」がパンデミックでの休止期間を経て2023年11月21日に4年ぶりに開催されました（出版クラブ）。ただし、参加社数の推移、講演テーマ選択などを踏まえ2024年については開催を一旦休止し今後のあり方を検討することとなっています。

○ 債権処理について

保留状態にあった債権1件について第73期決算にて損金処理を進めましたが、新たな債権がもう1件発生しました。第74期以降、破産管財人との連絡、顧問税理士事務所のアドバイスなどを踏まえ対応を検討してまいります。

以上、今後とも、総務委員会の活動にご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(委員長 白石 泰夫：医歯薬出版)



## ◆ 4. 自然科学の時間 ◆

### 「プラネタリウム 100 周年」

もうり かつひろ  
毛利 勝廣

(名古屋市科学館 学芸員)

#### 1. プラネタリウム大国・日本

日本には約 300 ヶ所のプラネタリウム施設があります。「え？ そんなに」と思われる方も多いと思いますが、すべての都道府県にプラネタリウムがあり（図 1）、年間で見るとサッカーの J1 リーグ観客数よりもたくさんの方がプラネタリウムを訪れています。世界的に見てもアメリカ、中国に続いて第 3 位の施設数。さらに中央に機械があつて、そこからドームに星空を映し出す光学式プラネタリウムの世界的な主要メーカーが 4 社あるのですが、そのうち 3 社が日本にあります。まさに日本は世界有数のプラネタリウム大国なのです。

この光学式プラネタリウムを有する施設の中で、世界で最も大きなドームを有するのが名古屋市科学館で、日本国内で最も多くの観覧者を迎えています（図 2）。さらに最近では高解像度のビデオプロジェクターを使って、星空を映像として投影するデジタル式プラネタリウムが増え、名古屋市科学館のように光学式と併設している施設、中にはデジタル式のみという施設もあります。

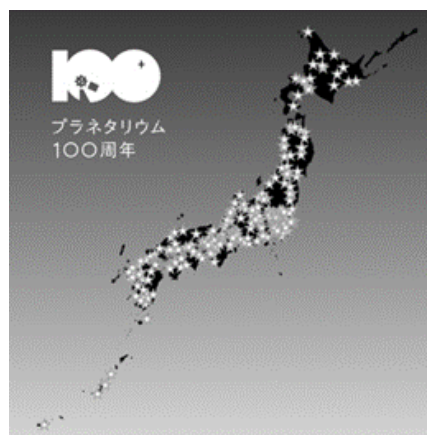


図 1：日本国内のプラネタリウム分布  
(©日本プラネタリウム協議会)



図 2：名古屋市科学館外観 (©名古屋市科学館)

## 2. プラネタリウムの誕生

プラネタリウムという言葉はもともと「惑星（プラネット）に関わる場所（アリウム）」の造語です。プラネタリウムと名乗った施設で最古、かつ現存しているのがオランダのアイジンガー・プラネタリウムです（図3）。これは1774年の惑星直列に乗じて流されたデマに惑う人たちをみたアイジンガーが、独力で7年の年月を費やして自宅居間の天井に作り上げた惑星儀。天井から吊り下げられた中央の太陽の周囲を惑星たちが周り、その日の位置が示されています。惑星たちはそれぞれの周期で淡々と周回しているため、時にはある方向に並ぶことがあっても、それはデマとして言い立てられたようなこの世の終わりにはつながらないことを示しました。1781年から200年以上たった現在も、このアイジンガー・プラネタリウムは稼働しており、2023年9月に世界遺産に認定され多くの方が訪れています。



図3：アイジンガー・プラネタリウム内観  
(©名古屋科学館)



図4：ツァイスI型プラネタリウム  
(©Deutsches Museum München)

現在、多くの方がイメージする丸いドームのプラネタリウム施設（近代プラネタリウム）は、今から100年前、ドイツのCarl Zeiss社により発明されたものです。プラネタリウムの初号機、ツァイスI型（図4）は1923年10月21日、ドイツ南部のミュンヘン市にあるドイツ博物館館内のドームで試験公開されました。その後、ドイツ中部のイェナ市にあるCarl Zeiss社の工場での改良と試験公開が行われました。そして1925年5月7日に再びドイツ博物館に設置され、一般公開が開始されました。その一般公開にいたる一連の出来事の100年後として、2023年10月21日から2025年5月7日の約1年半が「プラネタリウム100周年」として世界的に祝われています。

## 3. 星や惑星を投影させる技術

この光学式プラネタリウムの発明は、それまでの二つの流れを一気にまとめて解決する大きな発想の転換によるものでした。

一つ目は天球の再現です。もともと空は丸く見えますから、地球という概念よりも古くから天

球という概念がありました。そこで星空を再現したいという人々の願望は、この丸い天球を絵や石の彫り物として表現するところからスタートしました。ただ球体を外から眺めることになるので、普段、天球の内側から見上げているのとは星座の向きが裏返しになってしまいます。そこで大きな球体を作って、見る側が中に入るということを考えました。人が入れるサイズの球体を作り、星の位置に孔を開けます。外側を明るくしておいて、中に入り扉を閉じれば、中は真っ暗。そして孔から星の光が差し込んでくるという仕組みです。17世紀に作られたゴットルプの巨大天球儀や 20 世紀のアトウッドの巨大天球儀が、それぞれロシアのサンクトペテルブルグとアメリカのシカゴで現存しています。シンプルでストレートな発想ですが、同時に体験できる人数や星空の動きに合わせて回すことを考えると大きさに限界があり、星空の中で日に日に位置を変えていく月や惑星の表現にも難がありました。

もう一つは刻々と空の中で位置を変えていく月や惑星の表現です。ギリシャ時代の沈没船から引き上げられた最古の機械式天文・暦計算機と言われるアンティキティラの機械は、2,000 年もの間、海に沈んでいたので原型は大きく失われていますが、月や惑星の位置や日食月食を表すことができたと考えられています。時代が下ると時計の精密技術と結びつきつつ、惑星儀としての完成度を高めていきます。その究極が前述のアイジenger・プラネタリウムです。ただしこれらは宇宙視点での太陽系の模型であり、地球から見上げたときの月や惑星の位置を表すことはできてはいませんでした。

100 年前の近代プラネタリウムの発明はこの両面の問題点を解決するだけでなく、夜空の仮想体験ができる画期的なものでした。まずドームの側を単なるスクリーンとし、恒星や太陽、月、惑星を光学式プラネタリウムと呼ばれるドーム中央のメカニズムから投影します。本体内部の明るい光源の前に、星々の位置に孔をあけた恒星原板を置き、孔から出た光を、レンズを使って投影します。星は鋭い点像なので、魚眼レンズのようなものすべてをカバーしようとするすると視野の縁のほうは暗く歪んでしまいます。そこで天球を 32 面体に分割して、それぞれの方向に向けた中望遠レンズで星空を投影しています。

次に、太陽や月、惑星が位置を変える仕組みは、太陽系のミニチュアモデルになっています。当該天体と地球の楕円軌道、軌道傾斜角などを機械仕掛けで正確に再現し、地球と当該天体をつないだ軸に惑星の像を映し出す投影機をつけることで、星空の中を個別に位置を変えながら投影できます。

昼間に多くの見学者が同時に夜空を体験でき、その星空の中、月や惑星があるべき位置に見えているという驚きのバーチャルリアリティ環境が近代プラネタリウムによって実現したのです。

#### 4. プラネタリウムに行ってみよう！

1925 年のドイツ博物館の一般公開から 12 年後の 1937 年、大阪市立電気科学館に日本初のプラネタリウムが実現しました。この時に設置されたカールツァイス II 型は現在も大阪市立科学館で公開されています。翌年 1938 年には東京有楽町の東日天文館にも設置されましたが、こちらは空襲で焼失してしまいました。第二次世界大戦後には、東京渋谷の天文博物館五島プラネタリウム (1958 年)、明石市立天文科学館 (1960 年)、市立名古屋科学館 (1962 年、現在の名古屋市科学館) にツァイス製大型プラネタリウムが導入されました。またそのころから国産のプラネタリウムが作られ始め、全国にプラネタリウムが広がっていきました。

プラネタリウムはこの 100 年間で大いに進化しました。星の輝きはますます鋭く表現され、ド



図5：名古屋市科学館プラネタリウム内観 (©名古屋市科学館)

ームを大きくして本物の空に近づけることもできています。またデジタル式プラネタリウムの発達により、全天を一続きの映像で埋め尽くすことができるようになり、宇宙旅行の擬似体験や、目で見えない波長でみた宇宙の表現なども可能になっています (図5)。また学術教育的な施設だけではなく、アミューズメントに特化した施設も出現しました。

全国のプラネタリウムは約300ヶ所ですから、みなさんのお近くにもきっとあるはず。開館日やスケジュールを確認してぜひお出かけください。プラネタリウムと一言で言っても、大きさや形、内容や運営はそれぞれに個性があります。旅先などでもちょっと気にして訪ねていただくと、素敵なプラネタリウムや星空との出会いがあるかもしれません。

★全国プラネタリウムマップ (日本プラネタリウム協議会加盟施設)

[https://planetarium.jp/public/planetarium\\_map/](https://planetarium.jp/public/planetarium_map/)



#### 執筆者略歴



1964年2月 名古屋市生まれ  
 1988年3月 名古屋大学大学院理学研究科  
 地球科学専攻修了  
 1988年4月 NTT データ通信産業システム  
 事業本部  
 1990年4月 名古屋市科学館天文係  
 現在に至る  
 2011年3月 名古屋大学大学院人間情報学  
 研究科で学位取得  
 2022年7月～ 日本プラネタリウム協議会理事長  
 2024年6月

## ◆ 5. 会員社訪問 社長インタビュー (No.12) ◆

### ●社長紹介●

かねほら しゅん  
金原 俊

(当協会における現職：理事 (2019 (令和元) 年～))

### ●訪問社情報●

【社名】株式会社医学書院 (IGAKU-SHOIN Ltd.)

【創立】1944 (昭和19) 年8月18日

【HP】<https://www.igaku-shoin.co.jp/>

【主な出版分野】医学・看護および関連領域の専門書籍・  
雑誌・電子媒体



### ■ テーマ1「株式会社医学書院について」

#### — 御社の沿革などをお聞かせください。

空襲が激しさを増す太平洋戦争末期の1944年8月18日、東京・本郷において医学書院の前身である、「日本医学雑誌株式会社」が創業しました。企業の整理を目的に戦時下に公布された「企業整備令」に基づき、日本の医書出版社は書籍を発行する「日本医書出版株式会社」(後の金原出版)と、雑誌を発行する「日本医学雑誌株式会社」(後の医学書院)に統括されることになりました。

その際に「日本医学雑誌株式会社」を興したのが、それまで兄弟とともに金原商店(後の金原出版)の運営にあっていた金原一郎(私の祖父)でした。資産などのない少人数からの出発で、戦時下で休業中のフレンチレストランを社屋としました。その時、一郎は50歳。長男の金原元(はじめ。後の社長で私の父)はまだ21歳の学生でした。

終戦となり大学を卒業した元は1948年、書籍を発行する「学術書院」を立ち上げ、その後の1950年、一郎の「日本医学雑誌株式会社」と、元の「学術書院」が合併し、医学の書籍と雑誌を発行する「医学書院」が誕生しました。社名は双方の社名から2字ずつとったものです。

蛇足ですが、冒頭に述べた創業日のちょうど10年後の同日に生まれたのが私です。ただの偶然ですが。

#### — 会社の雰囲気をごどのように感じていますか？

創業時に若き金原元が進めたのが、新しい概念やツールを積極的に取り入れる、という姿勢です。進取の精神、ということでしょうか。当時の最新IT機器ともいえる、高価な電話交換台を導入し、外線はただちに担当者に接続されたそうです。また、高級車メルセデスベンツを3台所有し、著者の送迎にフル回転し、著者の信頼を得たと聞いています。新しくて便利なものを積極的に取り入れる姿勢は、現在の電子出版や、新たなビジネスモデルの導入に活かされているように



思います。

しかし、それだけでは不安定となってしまうためか、一方で、極めて真面目で几帳面な一面もあります。「石橋を叩いて壊してしまう」とも言われますが、変化に非常に慎重な姿勢です。この一見すると相反する二つの面が一つの会社に共存していることが、当社の強さと言えるのかもしれませんが。

#### — 現在の社員やこれから入社してくる若い人への期待や希望はありますか？

まずは「可能性に挑戦してほしい」ということです。ネットの普及によって、これから社会はますます様変わりするでしょう。その時に生じる新たな需要に対する、新たな事業の可能性に挑戦してほしいです。そのためには「嗅覚を高めて柔軟に対応」することが必要です。社会の変化にいち早く気がつくには、嗅覚が優れていなければなりません。そのうえで、その変化に柔軟に対応することが肝要です。対応するときには大事なことは、「自分でよく考える」ということです。前例や他者の例は参考になりません。立ち止まっても良いので、自分でよくよくその妥当性を考えることです。その結果、方向を決めたら「信念をもって遂行してほしい」ということです。時には自分だけが正しいこともあります。こうした変化の時代には、真理は多数決の中にはないのです。そのときに大事なものは、熟考の末に出した結論であれば自信と信念をもって遂行することだと思います。最後は「人への優しさ」ですね。自分一人では何もできません。人に対して思いやりと優しさをもって接することで、初めて物事が達成できるでしょう。

## ■ テーマ2「過去・未来について」

### — 社長になる前にはどのような経験をされてきたのでしょうか？

大学卒業前後から、医学書院の子会社の印刷会社に5年ほど勤めました。この時私がテーマに掲げたことのひとつが、如何にそれぞれの本作りに合わせた組版、用紙、印刷、製本方法を選択するか、ということでした。それはそれは楽しいテーマでした。元々、モノづくりは私の大の好物なのですが、ここで本作りの喜びを感じることができました。

もう一つのテーマが今に通じるデジタル化です。当時は活版から電子組版、オフセット印刷へと大きく転換する時期で、そこで肝となるのがコンピュータの活用です。無類の機械好きである私にとって、とことん深く考えることは少しも苦にならない、かつ意義のあるテーマでした。

その後、やはり医学書院が有していた米国ニューヨーク州の現地法人に勤め、2年間、経理や制作を担当しました。アメリカでの実務経験と生活は、今でも、大変有益な経験となっています。よく言われますが、海外に行ってわかるのは、むしろ日本についてです。元々、日本で印刷会社という、やや古典的な会社に勤めたのも良かったのかもしれませんが。日米の文化の違いの中で真理を探究し、どの道を我々は進むべきかを考えるのは、とても貴重な経験だと思っています。

### — 現在、世界そして日本にとっても大きな変化が起きていますが、今後日本はどうなっていくと思いますか？

ネットの出現は社会の在り方を大きく変えました。出版も例外ではありません。出版の役割は情報伝達にあるので、情報革命であるネットは、出版にこそ影響するでしょう。すでに大きな影響がある、と感じているかもしれませんが、本当の変化はこれからやってくるのだと思います。

一方、科学技術はオープンサイエンスへと向かっています。科学技術の発展のためには、情報

を秘密にして競争を促すより、ネットを介して多くの人と情報を共有したほうが有効だ、という考え方です。実際にネットを用いれば、誰でも世界中の人に、瞬時に大量の実験データまで含めて提供することも容易です。

今後、どのような社会になろうとも、情報が必要でなくなることはないでしょう。むしろさらに必要になると思われます。問題はそのときに、情報の発信者と受信者の間に、どのようなサービスが必要とされるかですが、それはまだよくわかりません。

### ■ テーマ3「自然科学書協会の今後について」

#### — 今後取り組みたいこと、期待していることは何でしょうか？

出版物も紙媒体であるうちは、一般書も専門書も教科書も娯楽本も随筆も経済書も、見た目や形態に大差はなく、分野が異なっても同じように取次を介して、同じように書店で販売することができました。しかし、電子になると分野によって、その形態も機能も販売方法も、かなり異なってきました。分野による性格の違いが、電子になって露呈したのかもしれませんが。電子に移行するに従い、自然科学書は、その特性や対象に応じた対応が必要となるわけで、今こそ、自然科学書協会という場において論議する意義があり、自然科学書の出版社が結束する意義があるように思います。



## ◆ 6. 第74期 第1回研修会報告 ◆

2024年6月7日(金)15時30分から17時まで、文化産業信用組合本店3階大会議室にて、研修会を開催しました。当日は22名にご参加いただきました。

今回は、文化産業信用組合 営業企画推進部より、中小企業診断士でゼネラルマネジャーの安田和博氏と、顧客支援課長でシニアマネジャーの早坂直行氏の御二方をお迎えして、「<最新>出版社のための補助金・助成金解説&顧客支援課のサービスと事例」と題し、国や自治体からの補助金・助成金についてご講演いただきました。

講演では、出版社の事業活動に生かしやすい補助金・助成金について、概要・対象者・補助率や上限・採択率・スケジュールなどの紹介がありました。

具体的には、経済産業省による「小規模事業者持続化補助金」、「事業再構築補助金」「事業継承・引継ぎ補助金」、東京都中小企業振興公社による「IT 導入補助金」、「新たな事業環境に即応した経営展開サポート助成金」、「展示会出展助成金」、文化庁による「海外における日本書籍の出版・流通に向けた翻訳助成」を詳細いただきました。各補助金の解説の際には、具体的な活用事例を挙げて、申請から採択に至るまでの流れや事業規模などについても提言がありました。

次に、厚生労働省や東京都による人事・労務などに活用が見込める「65歳超雇用推進助成金」「働くパパママ育児応援奨励金」「人材開発支援助成金」などの助成金について、具体的な助成額を含めてご説明をいただきました。

また、講演後半では、2023(令和5)年4月に文化産業信用組合に創設された顧客支援課の取り組みをご紹介いただきました。具体的な活動内容としては、補助金・助成金の活用提案と申請サポート、ビジネスマッチング、事業継承・経費削減などのコンサルティングを行っておられるとのことでした。補助金の採択に至った成功例をいくつか挙げていただきましたが、各社とも自社の強みを生かしつつ、進取の意欲に満ちた事業案が採択を勝ち得ていることがよくわかる内容でした。

当日ご清聴いただきました会員社の皆様に御礼申し上げます。

(研修委員長 片岡 一成：恒星社厚生閣)



会場風景



講師の早坂氏(左側)と安田氏(右側)

## ◆ 7. 事務局だより ◆

### ●理事会

<第73期>

- ・4月18日(木) / 文化産業信用組合
- ・5月16日(木) / 文化産業信用組合

<第74期>

- ・6月20日(木) / 文化産業信用組合
- ・7月18日(木) / 日本出版クラブホール・会議室

### ●委員会

<第74期>

- ・7月9日(火) 広報委員会 / ハイブリッド方式(コロナ社会議室・Zoom)

### ●監事会

- ・6月27日(木) / 文化産業信用組合

### ●第74期定時総会

- ・7月18日(木) / 出版クラブホール・会議室

### ●届出事項変更

<住所表示変更>

株式会社 協同医書出版社

新住所表示：〒113-0033 東京都文京区本郷3-21-10 TWG本郷

<代表者・当協会に対する代表者の変更>

- ・株式会社 日本臨牀社 旧代表者：瓦谷 秀治 新代表者：森本 裕司

<著作・出版権委員会委員の変更>

- ・共立出版株式会社 旧委員：影山 綾乃 新委員：大越 隆道

### ■2024年5月7日(火)「第63回全出版人大会」

(一般財団法人日本出版クラブ主催・当協会協賛)が、ホテルニューオータニ・鶴の間にて開催されました。



## ◆ 8. 編集後記 ◆

会報をお読みいただきありがとうございます。

新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類感染症に移行されて1年が経過しました。以前はデータを比較する際に「コロナ前」の2019年以前と比較することが多かったですが、最近は「前年比」が使われることも増えてきたように思います。

通勤電車の中ではまだマスクを着用している方も多いですが（これはコロナ対策だけではありませんが）、行楽地ではほぼノーマスクということも珍しくはなくなりました。着実に以前の日常に戻りつつあるのだと実感します。

一方でテレワークやオンラインツールは新たなスタンダードとして定着しつつあります。

今後も皆さまに有用な情報をお届けするよう取り組んでまいります。

ぜひ次号もご覧ください。

(広報委員会 逸見 健介：南江堂)

### ● 第73・74期広報委員会 ●

委員長：牛来真也（コロナ社）

副委員長：曾根良介（化学同人）

委員：原 純子（オーム社）

山田貴史（化学同人）

門間順子（共立出版）

加藤義之（建帛社）

高田由紀子（恒星社厚生閣）

新井明良（コロナ社）

逸見健介（南江堂）

飯岡千恵子（丸善出版）

